

## 『江戸名所記』に見る17世紀中頃の江戸の名所の特徴

佐々木邦博\*・平岡直樹\*\*

\*信州大学農学部 森林科学科

\*\*エスパス研究所 長野県上伊那郡〒399-4511

**要約** 本研究の目的は、江戸という17世紀初頭から建設されていった都市において、どのような名所が形成されていったのか、その特徴を明らかにすることにある。名所は、古くは和歌を詠むときに用いる歌枕の場所を指していた。その後、狭義の意味を離れ、名高い場所を指すようになる。その時期が中世から近世にかけてといわれている。そこで17世紀初頭に成立した江戸という都市を対象に、成立した名所の特徴を調べた。その結果、歌枕になった名所は少なく、特に17世紀後半に風情を楽しむ名所が増加していったことが判明した。

**キーワード**：江戸名所記, 17世紀, 東京, 浅井了意, 観光

## 研究の目的

名所という言葉を知れば、それぞれの人がある場所を頭の中に思い描くだろう。現代でもよく使われている言葉だが、観光名所あるいは名所旧跡というように、他の言葉と一緒に用いられることも多い。名所は「名高い場所」という意味で用いられているが、特に景色がよい場所や歴史的な事件があった場所、また和歌に詠われた場所があげられる。しかし、古くは「なごころ」とも言われ、和歌の歌枕として取り上げられた場所こそが名所であった。中世から近世にかけてその狭義の意味を離れ、広義の、人々が見に訪れる「名高い場所」という意味に展開する。

ところで、近世を考える上で重要な都市の一つに江戸がある。徳川家康が、1590年(天正18)に江戸に入り、城を築いて以来、幕藩体制の中心地として急速に発展を遂げた。その100年後の元禄年間には「花のお江戸」と称されるまでに繁栄する。まさに近世に生まれた都市といえる。そしてその間に江戸において名所と呼ばれる万人に親しまれた場所が誕生していった。

そこで本研究の目的だが、江戸という都市が成立してから繁栄を誇る元禄年間(1688—1704)までの間に、どんな場所が名所とされていったのか、名所の形成とその特徴を探るための第一歩として、江戸

における最初の名所案内である『江戸名所記』に記載された名所の特徴を明らかにすることにある。

17世紀の江戸の名所に関する研究には次のものがある。まず水江漣子による「近世初期の江戸名所」<sup>\*1</sup>というすぐれた論文がある。慶長19年(1614)の奥書を持つ『見聞集』<sup>\*2</sup>を分析し、歌枕としての名所が、一般の人が見て楽しむようになったことを記した最初の本という点を明らかにしている。樋口忠彦らによる「江戸の四季の名所について」<sup>\*3</sup>には、江戸の四季の名所が分析されている。しかし、主に用いられている文献は『江戸名所花暦』<sup>\*4</sup>(1827, 文政10)と『東都歳時記』<sup>\*5</sup>(1838, 天保9)であり、19世紀の江戸の状況が主たる研究対象となっている。17世紀においては文献資料を並べた上で、それらの記述から四季の名所が多様化していると述べるにとどまっている。渡辺勝彦らによる「名所の形態要素、一江戸時代4都における都市景観の研究1—」<sup>\*6</sup>は名所図会に描かれている景観を研究の対象とし、景観の構成要素を分析している。その結果、『江戸名所記』の図は建築物が中心であることが述べられている。また、『日本名所風俗図会3, 江戸の巻1』<sup>\*7</sup>の巻末に掲載されている解説には、「一、江戸名所記」の項に、17世紀における江戸全体を対象とした地誌の主なものを取り上げられ、それぞれに掲載されている名所が述べられている。

本研究は『江戸名所記』における名所の特徴を捉えていくことを目的としているが、既存の研究においては、この点が鮮明にはなっていない。

受理日 8月23日

採択日 11月7日

## 研究方法

江戸時代において江戸全体を対象とし、各名所を説明した最初の本は浅井了意による『江戸名所記』<sup>\*8</sup>である。まず、この本を用い、取り上げられた名所の特徴を分析していく。次に、それらの名所を当時の地図に落とし、地理的な特徴を探っていく。

### 『江戸名所記』について

『江戸名所記』を著したのは浅井了意(？-1691)である。寺の住職の子として生まれ、その後諸学問を研鑽したと推定されている。1659年(万治2)から仮名草子を続々と執筆し始める。仮名草子とは「多少とも文学性のある散文作品」で「真名(漢字)本に対する仮名本という用字により区別」<sup>\*9</sup>された、いわば大衆向けの本の総称である。多くの本を執筆しているが、1662年(寛文2)に書いた一冊が『江戸名所記』である。

『江戸名所記』は7巻からなる書物である。巻一の冒頭において「江戸御城」や「日本橋」「東叡山」をとりあげたあと、巻を追うごとに江戸城を中心にして時計の針の方向に名所を次々と取り上げている。名所の総計は80ヶ所に及んでいる。各々の場所の説明には絵や狂歌が挿入され、場所によっては古歌も引用されている。ゆえに、当時の江戸を知る上で、貴重な資料といえる。

### 『江戸名所記』に示された名所の特徴の考察

#### 1. 対象とした名所

『江戸名所記』には80ヶ所の名所が取り上げられているが、巻一の最初にあるのは「武蔵国」であり、この地方全体の説明である。また、巻七に取り上げられている「橘樹郡栄興寺」は神奈川県川崎市高津区にある影向寺のことであり<sup>\*10</sup>、江戸の近郊にあるとはいいがたい。よってこの2ヶ所を除いた78ヶ所を分析の対象とする。

これら78ヶ所を一覧表にしたのが、表-1である。次に、それらの場所を整理してして集計したのが表-2である。寺が最も多く、42ヶ所と過半数を占めている。次に神社が19ヶ所、また、寺とも神社とも判別できない焰魔堂が2ヶ所ある。もっとも、この時代には寺の中に産土神などをまつた神社があり、また神社も別当寺を持つこともあったので、これら

を合わせて宗教施設として考えるなら、63ヶ所となる。また、丘である「東叡山」と「愛宕山」にもそれぞれ寺社があるわけであり、これも含めると、65ヶ所となる。このように、『江戸名所記』に取り上げられた名所は、由緒など古い話をもつ寺社などの宗教施設が圧倒的に多いことがわかる。その他に、桜が2ヶ所取り上げられているが、それぞれ単木の桜であり。名称が付けられている由緒あるものである。歓楽街である「禰宜町」<sup>\*11</sup>が「浄瑠璃」と「歌舞伎」の2項目に分けられて取り上げられているが、「禰宜町」がその2区画に分けられていたのかどうか、記述の上からでは判別できない。

#### 2. 記述の特徴

##### (1) 記述内容

次に記述の内容だが、ほとんどの場合、各々の名所にいてその来歴を紹介することがその説明の中心となっている。その後、特に社寺の場合、神事や祭り、また霊験や御利益について述べていることが多い。また、その場所の説明がなされていることもある。すなわち、建物の様子や神木などその場所にある特徴的なもの、さらにそこから見える眺望景観や付近の町の様子について述べていることもある。しかし、これらすべてが各名所において記されているわけではなく、きわめてあっさりとした来歴のみを述べている場合も多い。水江漣子の論文<sup>\*12</sup>から察するなら、来歴や由緒を記した部分は知識を重視した歌枕としての名所と通じるものであり、それ以外の部分が見て楽しむという新しい名所のあり方につながるものである。よって、後者の記述を対象とし、その部分で多く記されている樹木、風情、眺望という点から、これらの名所を分析していく。

##### (2) 樹木

これらの名所の空間的な特徴を知る上で重要となる要素の一つに、樹木がある。しかし、『江戸名所記』の各名所につけられている挿絵には80ヶ所中72ヶ所とほとんどの名所で樹木が描かれているにもかかわらず、樹木はそれほど記述されてはいない。樹木についての記述がある場所では、樹木が名所を特徴づける重要な要素になっていたと考えられる。それをまとめたのが表-3である。20ヶ所の名所で樹木が記されているが、7ヶ所において「松」が、6ヶ所において「桜」が取り上げられている。「桜」は春のお花見もあるので記されることが多いと考えられるが、「松」に関しては「松山」という記述が「浅草金竜山付真土山」<sup>\*13</sup>にあるように、江戸では松が多く見られたと同時に非常に重宝されたと想定

表一 1 名所一覧表

巻	項	場 所
1	1	武蔵國
1	2	江戸御城
1	3	日本橋
1	4	東叡山
1	5	不忍池
1	6	牛天神
1	7	忍岡稻荷
1	8	神田広小路薬師
1	9	湯嶋天神
1	10	神田明神
1	11	谷中清水稻荷
1	12	谷中法恩寺
1	13	谷中善光寺
1	14	谷中感応寺
1	15	新堀村七面明神
2	1	駒込村吉祥寺
2	2	駒込村富士社并不寝権現
2	3	西新井惣持寺
2	4	浅草観音
2	5	浅草明王院付姫淵
2	6	石浜村 泉寺付妙亀山
2	7	浅草金竜山付真土山
2	8	浅草三十三間堂
2	9	東本願寺
2	10	浅草報恩寺
2	11	浅草日輪寺
2	12	大雄山海禅寺
2	13	浅草薬師
2	14	浅草清水寺
2	15	浅草誓願寺
3	1	神田天沢寺
3	2	浅草町西福寺
3	3	森田町大六天
3	4	浅草焰魔堂付十王
3	5	草駒形堂
3	6	浅草文殊院
3	7	角田川
3	8	西葛西浄光寺薬師
3	9	葛西郡東照院若宮八幡
3	10	東葛西善導寺
3	11	牛嶋業平塚
3	12	西葛西本所太神宮
3	13	牛島太子堂
3	14	深川泉養寺付神明
4	1	廻向院
4	2	三俣
4	3	永代島八幡宮

4	4	禰宜町浄瑠璃
4	5	禰宜町歌舞伎
4	6	西本願寺
4	7	増上寺
5	1	芝瑠璃山遍照寺
5	2	窪町烏森稻荷
5	3	芝金杉村西応寺
5	4	田町八幡
5	5	芝大仏
5	6	芝焰魔堂
5	7	芝泉学寺
5	8	品川東海寺
5	9	品川水月観音
5	10	池上本門寺
6	1	豊嶋郡目黒不動
6	2	入間郡赤坂氷河大明神
6	3	永田馬場山王権現
6	4	牛込右衛門桜
6	5	堀兼井
6	6	牛込穴八幡宮
6	7	豊郡曹司谷法明寺
6	8	小石川金剛寺
6	9	関口村目白不動
6	10	極楽之井
7	1	小石川伝通院
7	2	渋谷金王桜
7	3	金杉村天神
7	4	白山町白山権現
7	5	橘樹郡栄興寺
7	6	日比谷神明
7	7	金輪寺
7	8	愛宕山
7	9	吉原

表一 2 名所の区分

類 型	項目数
寺	42
神社	19
歓楽街	3
焰魔堂	2
丘	2
川	2
桜	2
井戸	2
城	1
橋	1
池	1
塚	1

表一 3 樹木が記載されている名所

巻	項	場 所	樹 木
1	6	牛天神	松梅は神木
1	7	忍岡稲荷	神木は榎、糸桜 (しだれ)
1	9	湯嶋天神	梅
1	1	谷中清水稲荷	神木は杉
1	12	谷中法恩寺	桜2本
1	13	谷中善光寺	並木の桜
2	2	駒込村富士社并不寝権現	センダンの林
2	7	浅草金亀山付真土山	松山
3	2	浅草町西福寺	藤
3	3	森田町大六天	センダン2本
3	7	角田川	目印は柳
5	3	芝金杉村西応寺	講堂の前後に園林、老松
5	4	田町八幡	前は松林にて
5	5	芝大仏	並木の桜
5	7	芝泉学寺	並木の松
6	1	豊嶋郡目黒不動	まがり松
6	4	牛込右衛門桜	桜
6	6	牛込穴八幡宮	二木の松を神木
7	2	渋谷金王	桜
7	3	金杉村天神	神木は榎

される。それ以外には「梅」や「榎木」など6種類の樹木が取り上げられている。それらが名所の空間を彩る代表的な樹種だったと考えられる。

次にどのようなものとして記載されているかという点だが、「神木」としてが5ヶ所、「並木」が3ヶ所、「林」が2ヶ所である。樹種との対応関係を示したのが表一4である。「神木」として取り上げられている樹種は松、梅、榎、桜、杉の5種である。桜と榎が2カ所で取り上げられている他は、それぞれ1カ所で取り上げられている。「並木」としては桜が2カ所、松が1カ所で取り上げられている。「林」としてはセンダン、松がそれぞれ1カ所で取り上げられている。松は「神木」「並木」「林」のそれぞれの形態で取り上げられており、単木としても、列植や群植としても重宝されていたことがわかる。「神木」は神社の象徴であるし、「並木」は空間を装飾したり、分けたりするものである。こういった樹木が特に目立ったのだらうし、重要視されたと考えられる。

### (3) 風情

次に、風情という観点からこれらの名所を捉えてみる。それは自然や季節のうつろい、あるいは変わりゆくもの、動きのあるものらを味わうという点である。こうした記述がある名所をまとめたのが、表一5である。なお、花木の場合は樹種名が載せられているだけの場合も含めている。

18ヶ所において記述されているが、多く取り上げられている要素は、6ヶ所で取り上げられている「桜」、5ヶ所で取り上げられている「月」、4ヶ所で取り上げられている「風」である。花鳥風月という自然の美しい風物の代名詞となっている表現があるが、その中の3要素である。他と比べてこうした記述がとりわけ興を持って書かれている名所は「不忍池」「三俣」\*14「西本願寺」の3ヶ所だが、「不忍池」では池に吹く「風」と「月」の様子に興味で語られている。「三俣」では、8月15日にのみ許された「花火」の様子と三俣から見る「月」のすばらしさが語られているが、「花火」は文字どおり花にたとえられている。「西本願寺」では、海の風情が中心であり、順風に帆をあげた舟と歌い声、岸打つ波

表一 4 樹種と形態

形態／樹種	松	梅	榎	桜	杉	センダン
神木	2	1	2	1	1	—
並木	1	—	—	2	—	—
林	1	—	—	—	—	1

表一 5 風情が記載されている名所

巻	項	場 所	風情 (内容) 要素
1	5	不忍池	風、月
1	6	牛天神	梅
1	7	忍岡稲荷	糸桜、風
1	9	湯嶋天神	梅
1	12	谷中法恩寺	桜
1	13	谷中善光寺	並木の桜
3	2	浅草町西福寺	藤
3	14	深川泉養寺付神明	月、花
4	2	三保	花火、月
4	3	永代嶋八幡宮	塩屋の煙
4	6	西本願寺	帆船、漁り火、波、千鳥の声、月
5	3	芝金杉村西応寺	老松の枝
5	5	芝大仏	桜、風
5	6	芝焰魔堂	波の音
5	7	芝泉学寺	雪、風、漁火、月、帆船
6	1	豊嶋郡目黒不動	まがり松
6	4	牛込右衛門桜	桜
7	2	渋谷金王桜	桜

表一 6 眺望が記載されている名所

巻	項	場所	表現	眺望の対象
1	3	日本橋	景面白し	浅草東叡山、富士山、御城、舟
1	4	東叡山	目の下にみゆ	江戸中
1	7	忍岡稲荷	絶景	不忍池
2	7	浅草金竜山付真土山	みゆ	浅草川、牛島新田、大道
4	2	三保	絶景	浅草寺、深川新田、東叡山、江城、愛宕山、伊豆大島、富士山、安房、上総
4	3	永代島八幡宮	地景は類少ない	安房、上総、品川、池上、富士山、江城、筑波山、下総、塩屋の煙
4	6	西本願寺	絶景、眺望、美景	安房、上総、伊豆大島、富士山、舟、漁り火
4	7	増上寺	絶景の眺望	後ろは山、前は高き山門、京都江府の海道、行き交う舟
5	7	芝泉学寺	絶景、眺望に興	高い山門、門の内の並木の松、帆かけ舟、漁り火

や千鳥の声、秋の夕べの月影などが述べられている。それぞれ独特の魅力を持つ場所だが、上記した3要素が重要な要素となっていることがわかる。

また、表一5に見られるもう一つの特徴は、記されている要素の豊富さである。花だったら、「桜」以外にも「梅」や「藤」があり、「花火」という季節の行事もある。「波」や「千鳥の声」といった音もあり、「月」や「漁り火」といった夕方から夜の風情もある。また、四季の美しさの代名詞的な表現として「雪月花」という言葉があるが、その3要素がすべてある上に、夏に行われる「花火」もあり、すでに四季の美しさを江戸という都市においても楽しんでいたことわかる。そしてこれらの要素の幅広さは、江戸という空間に形成された要素を十分に味わおうとするものといえる。

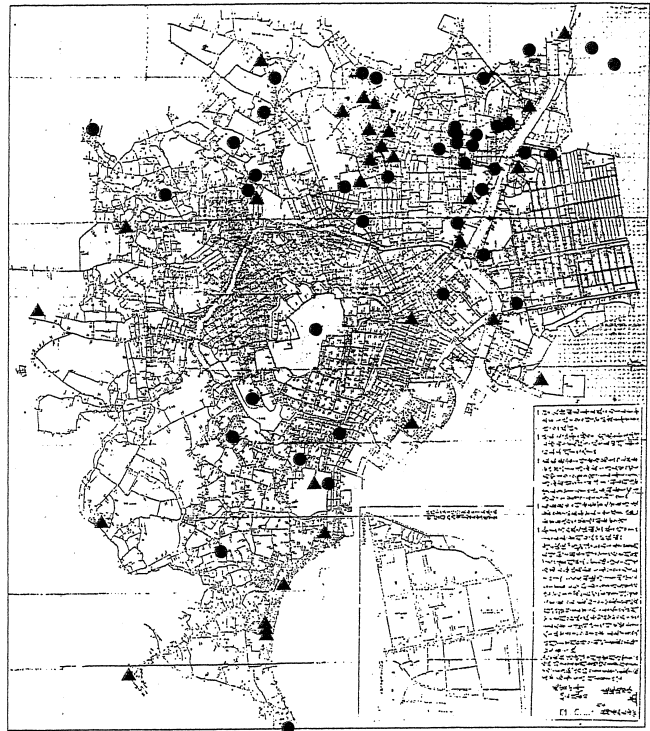
#### (4) 眺望

最後に眺望景観を取り上げよう。文中では「景」という単語が用いられているのだが、名所によっては「絶景」と記されているほどである。78ヶ所の内で眺望景観がよいと記されている場所は9ヶ所あり、それらを一覧表にしたのが表一6である。この中で特殊なのは、太鼓橋の上からの眺望が取り上げられている「日本橋」であろう。他の8ヶ所は、丘の上からの眺望3ヶ所（「東叡山」「忍岡稲荷」\*15「浅草金竜山付真土山」）と、多少なりとも小高い土地も含まれるが、海辺の眺望である5ヶ所である。

次にそれらの名所から見えるものだが、東叡山や愛宕山などの江戸の丘、江戸城、また近郊に広がる新田がある。遠景としては富士山や房総半島の山々、伊豆大島などがあげられている。そして行き交う舟や漁り火、塩屋の煙といったいわば生業の風景があげられているのが特徴である。

また名所の敷地内にあるものもあげられている。「増上寺」と「芝泉学寺」\*16では高い山門やその内側に続く松並木があげられている。しかし、両者の場合も、本堂の方から眺めるなら、山門の外をはしる街道や海が山門と一緒に見えているのである。

ところで、特に「絶景」と記されている名所がある。絶賛されているわけだが、それは「忍岡稲荷」「三俣」「西本願寺」「増上寺」「芝泉学寺」の5ヶ所である。「永代島八幡宮」\*17においても「まことにこの嶋の地景ハ又たぐいなし」と讃えられていることから同様に扱おうと、この6ヶ所にすべて共通する



図一 名所の配置

(注、樹木や風情、眺望が記載されている名所には▲、その他の名所には●で印を付けている。)

特徴がある。それは水に関する景観であり、不忍池を眺める「忍岡稲荷」を除いてはすべて海の景観である。しかも「三俣」を除く4ヶ所では生業の風景が捉えられているのである。この点に特徴があるといえる。

#### 名所の配置についての考察

次に、これらの配置を見るために、名所の場所を地図に落としたのが図一1である。用いた地図は1676年(延宝4)に発売された『新板江戸大絵図』である。いわゆる『寛文五枚図』\*18を一枚にしたもので、1657年(明暦3)の大火の後に測量された図面を元としているため、明治11年に内務省地理局が作成した『実測東京全図』と比較してもほぼ同一である\*19。

この地図は北は駒込から南は品川まで、東は本所と深川から西は新宿まで表しているが、地図内に入らなかった名所は北にある「西新井惣持寺」\*20と「金剛寺」\*21、南にある「水月観音」\*22と「池上本門寺」\*23である。「角田川」に関しては示しようがなかった。代わりに謡曲「隅田川」で取り上げられ、記述中にも説明されている「梅若丸の墓」\*24に印を付けてある。「東葛西善導寺」については場所がよ

くわからなかったゆえに示していない。また「駒込村富士社並不寝権現」は2社の距離が離れているために2ヶ所に印を付けた。「禰宜町浄瑠璃」と「禰宜町歌舞伎」は同じ町ゆえに1ヶ所に印を付けている。

全体的な傾向だが、名所は均等に分散しているのではない。中心にある空白地である江戸城から見ると北の方、特に北東に多く、江戸城周辺や西方には少ない。特に多いのは隅田川周辺であり、隅田川自体も取り上げられている。また隅田川と接するように西に名所が集中している場所があるが、浅草寺や東京本願寺がある浅草一帯である。1657年（明暦3）の大火後にこの地区に多くの寺が移転された。名所として取り上げられたのである。またその西側、江戸城の北北東の方向に名所が集中しているが、上野と谷中一帯である。この地区にも寺が集中している。

樹木に特徴がある名所を見るなら、周辺部に分散しており、そして多く集まっているのが上野・谷中一帯である。つまり、農林地が残っている所や、以前からある寺社が取り上げられている傾向がある。風情に関しては、集中しているのは上野・谷中であり、そして隅田川と海沿いに点在している。また眺望に関しては、橋の上からの眺めという「日本橋」を除くと、上野及び隅田川と海沿いにある。広い眺めというと、丘の上や海沿いが地形的に恵まれるだろうが、やはりそのような場所が名所として取り上げられているのである。

## 結 論

『江戸名所記』における名所の特徴だが、由緒ある寺社が圧倒的に多い。しかし、名所の説明に事跡の説明が多いが、そこには樹木や風情、眺望などが記されている。それらの記述を分析した結果、樹木においては「松」と「桜」が多く記され、神木や並木などとして名所の空間を彩っていたことがわかる。風情に関しては、四季の多様な風物を楽しんでいた。眺望は遠景まで広がる壮大な広がり風景が特に好まれていたことがわかる。しかも生業や町の賑わいを見ることまで楽しみとしているなど、対象の幅に広さがあることが判明した。

名所の配置だが、江戸中心部には少なく、その近郊、特に北東に多い。しかも、樹木や風情、眺望が記されている名所は、上野及び隅田川と海沿いに集中することがわかった。

名所が知識を楽しむ歌枕としての名所から見て楽しむ名所へと変化が初めて記された17世紀初頭の1614年（慶長19）から45年後の1659年（万治2）には、江戸には以上のように見ることを楽しむような特徴を持つ名所が成立していた。それらの特徴は現代から見るとあまり特徴的ではないと思われるかもしれないが、逆に現代とつながる感覚がその当時にすでに養われていたといえるのである。そしてこのような名所を基盤として、18世紀初頭の享保年間には遊観所づくりが行われたと考えられる。

## 引用文献

- 1) 水江漣子（1985）：近世初期の江戸名所：西山松之助先生古希記念会編、日本の民衆と社会 吉川弘文館 3-33
- 2) 三浦浄心（1614?）：見聞集（慶長見聞集ともいう）
- 3) 樋口忠彦ほか（1981）：江戸の四季の名所について：日本都市計画学会学術研究論文集16,379-384
- 4) 岡山鳥（1827）：江戸名所花暦
- 5) 齊藤月岑（1838）：東都歳時記
- 6) 渡辺勝彦ほか（1985）：名所の形態要素 一江戸時代4都における都市景観の研究1ー：日本都市計画学会研究論文集20,13-18
- 7) 朝倉治彦編（1979）：日本名所風俗図会3，江戸の巻1：角川書店
- 8) 浅井了意（1662）：江戸名所記
- 9) 坂巻甲太（1985）：仮名草子：日本大百科全書第5巻 小学館 511
- 10) 現在の地名は『日本名所風俗図会3，江戸の巻1』の校注による。以下、同様である。
- 11) 禰宜町は中央区日本橋掘留町2丁目にあった。
- 12) 1)と同じ
- 13) 浅草金竜山付真土山だが、現在の待乳山である。台東区浅草7丁目にある小高い丘で、上には聖天宮がある。
- 14) 三俣は新大橋の下流の分流の所をいう。
- 15) 忍岡稲荷は台東区上野公園内にある。穴稲荷、あるいは浄雲稲荷ともいう。
- 16) 芝泉学寺は港区高輪2丁目にある万松山泉岳寺。
- 17) 永代島八幡宮は江東区富岡にある富岡八幡宮。
- 18) 遠近道印が造った地図で、まず『新板江戸大絵図』が1670年（寛文10）に発行され、その後、『新板江戸外絵図』が4枚発行された。合わせて『寛文五枚図』と呼ばれている。
- 19) 飯田龍一ほか（1988）：江戸図の歴史：築地書館 64-65
- 20) 西新井惣持寺は足立区西新井1丁目にある五智山遍照院総持寺。

- 21) 金剛寺は王子権現, 王子稻荷社の別当寺で, 王子権現の外右側にあった.
- 22) 水月観音は品川区南品川3丁目にある海照山普門院品川寺.
- 23) 池上本門寺は大田区池上1丁目にある長栄山大國院本門寺.
- 24) 梅若丸の墓は墨田区堤通1丁目の梅柳山隅田院木母寺にある.
- 

## Characteristics of the sights explained in “Edo-meisyoki” at Tokyo in the middle of 17th century

Kunihiro SASAKI\*

Naoki HIRAOKA\*\*

Department of Forest Science, Faculty of Agriculture, Shinshu University\*  
Espace Research Office\*\* Kaniinagun, Naganoken 399-4511

### Summary

This study aims to reveal the characteristics of the sights explained in “Edo-meishoki”, published in 1662, which is the first guide book of the sights in Edo, old Tokyo. As a result, there are explanations to enjoy seeing the sights, and this attitude didn't exist in the Middle Ages. It was enjoyable to see the pine and the cherry, things Japanese in four seasons, and fine wide views. Most of these sights were at Ueno, and along Sumida river and sea. It was supposable that these sights had formed a basis to lay out the Yukanjo lately.

**Key word** : Edo-meisyoki, 17th century, Tokyo, Ryoi ASAI, sightseeing